

『国富論』の冒頭における 「分業論」について

中 川 栄 治

序

周知のように、スミスは、『国富論』の冒頭において、富の具体的形態を、「国民が年々消費する生活の必需品と便益品」という一般消費物資、広い意味での生活手段として把握し、そして、この富の源泉を「年々の労働」であるとした。そして、国民が享受しうる「必需品と便益品」の多いき、すなわち、物質的な富裕の程度は、消費者数にたいする、労働によって直接もしくは間接にもたらされる「必需品と便益品」の総量の割合の大小におうじて決まる、とした。そしてこの割合を規定するものとして、かれは、外的な自然的条件ではなく、それに働きかける労働という人間の主体的能力に、注意をむけた。すなわち、「地味、気候、国土の大きさ」といった自然的条件によって消費可能な必需品や便益品の総量、したがって消費者数と生活手段総量の割合は影響されはするが、それらの自然的条件が「特定の状況のもと」においては、この割合は、つぎの二つの事情、すなわち、労働の生産性の程度、および、「有用な労働に従事する人々の数とそのような労働に従事しない人々の数の割合」とに、依存するとされ、さらに、¹⁾「野蛮民族」と「文明が進み繁栄している国民」を比較することにより、この二つの事情のうち、前者がより重要な決定因とされるのであった。

1) スミスによれば、「狩猟民や漁撈民という野蛮民族のあいだでは、労働に耐えることのできるものはだれでも、多かれ少なかれ有用な労働に従事する」にもかかわらず、「そのような民族ははじめなほどに貧しい」。それにたいして、「文明が進み繁栄している国民のあいだでは、多数の人々はぜんぜん労働しないのに、このうちの多くのものは、

このような関連のもとで、『国富論』第一編の最初の部分で「労働の生産力における改善の諸原因」が考察されるのであり、第一編第一章は、「労働の生産力における最大の改善と、どの方向にであれ労働をふりむけたり用いたりする場合の熟練、技能、判断力の大部分は、分業の結果であったように思われる」という文章ではじまり、分業論が展開されるのであった。

いうまでもなく、スミスの分業論については、これまでに、さまざまな角度から数多くの研究がなされてきたのであるが、本稿は、本稿作成の意図に関係するかぎりでそれらの成果に拠りながらも、「スミスの分業論」についての研究を含めて筆者による今後の『国富論』研究のための一つのステップとして、考察の範囲を『国富論』の冒頭の部分に限定し、第一編第一章から第三章に展開される「分業論」について、できるだけそこに展開される議論にそくしながら、筆者なりの一つの整理を与えることをおもな目的として、作成されたものである。

Ⅰ 労働の生産力と分業

序でみたように、スミスは、各人の享受しうる富裕の程度を規定する重要な要因としての労働の生産性に関して、労働の生産力の最大の改善、労働の熟練、技能、判断力の大部分は、分業の結果であるとするのであった。そこでいま、スミスの議論にそいながら、分業が労働の生産力に及ぼす効果をみることにする。

(前頁より続く)

働いている人々の大部分にくらべて十倍もの、しばしば百倍もの、労働生産物を消費する。それでもなお、その社会の全労働の生産物はたいへん豊富なので、すべての人々にたいする供給は豊かな場合が多く、最も低く最も貧しい階層の職人ですら、もしかれば儉約家で勤勉であるなら、どんな野蛮人が獲得できるよりも多くの生活の必需品と便益品の分け前を享受できるほどなのである。」(Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, edited…… by Edwin Cannan, with an Introduction by Max Lerner, The Modern Library, New York, 1937 <以下 *W.N.* と略記する>, ‘Introduction and plan of the Work’, p.Iviii. 大河内一男監訳『国富論』(全3巻), 中央公論社, 1976年, 第1巻<以下, 大河内訳, I と略記する, なお, 引用文において, 若干, 訳語を変更したところもある。>, 2ページ。<)

まずスミスは、「社会全般の仕事にたいする分業の効果を比較的容易に理解するには、どれか特定の製造業をとって、そこで分業がどんなふうに行なわれているかを考察してみるのがよいだろう²⁾」とし、大製造業よりも実際には分業の進展の度合いも社会にとっての重要度も低い観察の容易さという理由から、小規模な製造業を、そしてここでは、ピンを製造する作業場を例にとり、そこにおける分業の生産量増進効果を説明し、さらに、生産活動一般においてそこに分業が導入される程度におうじて、労働の生産力が増進させられるということを主張する。他方、このことに関連させて、つぎの三点を指摘する。第一に、「さまざまな職業や仕事がたがいに分化するのは、この利益の結果として生じたように思われる³⁾」ということ、第二に、この分化は、「最高度の産業と進歩を享受している国々で最も進んでいるのが普通である⁴⁾」、未開社会での一人の人間の作業は、文明社会では一般に数人の作業であり、文明社会では、農業者は農業者、製造業者は製造業者というように、職業の分化が確立され、同一人物がいくつもの職業を兼ねることが少なくなり、また、亜麻布や毛織物の生産が亜麻、羊毛の生産者から仕上工にいたるまでさまざまな職業を経て生産されているように、一つの完成品が生産される過程は多数の職業に分割されている、ということ。第三に、農業は、その性質上、製造業にくらべて分業が導入されにくい⁵⁾ため、農業における労働の生産力改善は製造業よりも遅れるということである。

ところで、スミスは、「分業の結果、同じ人数のものがつくり出すことのできる仕事の量がこのように大きく増加するのは、三つの異なる事情にもとづいて⁶⁾」とする。

第一の事情は、職人の技能の増進である。すなわち、分業の結果、個々の職人の仕事が単純な作業に還元され、またその作業がその人の生涯の唯一の仕事

2) *W.N.*, pp.3-4. 大河内訳, 1, 10ページ。

3) *W.N.*, p.5. 大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富』(全2巻), 岩波書店, 1969年, 第1巻(以下, 大内・松川訳, 1と略記する, なお, 引用文において, 若干, 訳語を変更したところもある。), 70ページ。

4) *W.N.*, p.5. 大河内訳, 1, 13ページ。

5) なお, この議論と第二編における資本の最も生産的な投下部門としての農業という議論との関係については, 別の機会に考察したい。

6) *W.N.*, p.7. 大河内訳, 1, 15ページ。

になってしまうことにより、職人の技能が増進し、かれの仕事の量が増加することとなる。⁷⁾ スミスは、釘作りに慣れていない鍛冶屋や釘作りを唯一または主要な仕事にしたことのない鍛冶屋による釘製造と、釘作りを唯一の仕事とする少年による釘製造とを比較することにより、他方、釘作りよりも簡単な作業への分割が可能なものとしてのピン、金属ボタンの製造を例示することにより、分業による職人の技能の増進、生産量の増大を説明しようとする。

第二の事情として、「ある種の仕事から他の仕事へ移る場合にふつう失われる時間の節約⁸⁾」、単位時間に支出される労働の強化⁹⁾があげられる。すなわち、分業が行なわれる結果、同一職業、同一作業に専念することが可能となり、作業をする場所のあいだの移動や作業の種類の変更によって失われる時間が節約される。すなわち、作業の連続性による無駄な時間の排除により、また、作業場所の移動や作業の種類の変更による注意力、勤労意欲の低下の防止により、労働の生産力が増進するとされるのである。

第三の事情として機械の発明、改善があげられる。すなわち、分業が行なわれる結果、職人は特定の作業にのみ全注意を集中することにより、かれ自身の作業をより容易に遂行するための方法を発見することが可能となる。スミスによれば、「労働がぐく細分されている製造業で使用されている機械の大部分は、もとはといえば、普通の職人が発明したものであった¹⁰⁾」とされる。さらに、分業の確立によって機械製作、学問、思索が一つの職業になるとき、機械製作者、学者、思索家によって機械が発明される。そして、その機械は、「労働を促進

7) スミスは、労働の熟練、技能といった要素を重視する。機械化の進行は直接的な個別労働者の熟練、技能という要素の重要性を低下させる側面をもつ。この点からして、スミスがここで分析の対象としている生産形態は、おもに、技能、熟練といった要素が相対的に重要性をもつマンユファクチュア段階のものであるということが、うかがえるであろう。なお、S. ホランダールは、スミスが産業革命の技術変革についての十分な認識を有していたことを示そうとしている(S. Hollander, *The Economics of Adam Smith*, University of Toronto Press, Toronto and Buffalo, 1973, chap. 7. 小林昇監修, 大野忠男, 岡田純一, 加藤一夫, 斉藤謹造, 杉山忠平訳『アダム・スミスの経済学』, 東洋経済新報社, 1976年, 第7章。)

8) *W.N.*, p.7. 大河内訳, I, 15ページ。

9) 内田義彦『経済学の生誕』, 未来社, 1962年, 230ページ。

10) *W.N.*, p.9. 大河内訳, I, 18ページ。

し、短縮し、しかも一人で多くの人の仕事をなしうるようにする¹¹⁾つまり労働の生産力を高めるのである。¹²⁾

11) *W.N.*, p.7. 大内・松川訳, 1, 73ページ。なお、スミスがここでいっている機械とは、たとえば、「水夫の乗る船、縮絨工の使う水車、さては織布工の織機のような複雑な機械はいうまでもないとして、ごく単純な機械、たとえば牧羊者が羊毛を刈り取る鉄」(*W.N.*, p.11. 大河内訳, 1, 21ページ)というように、こんにち道具とよばれるものも含むのであり、そこで考えられている機械は、どちらかといえば、労働の熟練の必要性を排除したり、直接個別労働者を従属させるような機械ではない。他方、スミスにおいては、分業から機械が説明されているように、労働の生産力の向上さらに物質的富裕の増進という問題については、機械化そのものには分業ほど重要性があたえられているわけではなく、そしてまた、モンテスキューやステュアートにみられる機械の使用による労働の雇用の減少の可能性ということは、問題にされない。スミスにおいては、機械は労働者に従属し、ただ、労働を促進し、短縮するのである。(茂木一之「分業論と『管理論』との初期的系譜——スミス、バベッジ、ユーアを中心として——」『高崎経済大学論集』第18巻4号, 1976年, 77ページ。Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, edited by R.H. Campbell and A.S. Skinner; textual editor W.B. Todd. 2 vols. Clarendon Press, Oxford, 1976. vol. 1, p.19, footnote 15. *Ibid.*, vol. 1, Editors' 'General Introduction', pp. 43-9.)

12) さらに、スミスによれば、社会の進歩につれ、学問、思索が他のすべての仕事と同じように、市民の一定階層の、主要なあるいは唯一の職業となり、また、他の仕事と同じように多数の異なった分野に細分されることにより、技能の向上、時間の節約から、各人はそれぞれの分野におけますます専門家となり、全体としてみるといそう多くの仕事は達成され、科学的知識の量はいちじるしく増大するとされる。

なお、たとえば、最近における、山崎怜氏によって示された『国富論』の「分業」体系(山崎怜「アダム・スミスと国家」〈大河内一男編『国富論研究』(Ⅲ), 筑摩書房, 1972年, 所収)やN. ロウザンバークの論文(N. Rosenberg, 'Another Advantage of the Division of Labor', *Journal of Political Economy*, vol. 84, Aug. 1976)にみられるような、『国富論』全体や『グラスゴー大学講義』等の諸講義も含めてスミスの諸著作を考察の範囲に入れた研究はいうに及ばず、たとえば、E. G. ウェスト, N. ロウザンバークによって議論された問題(E. G. West, 'Adam Smith's Two Views on the Division of Labour', *Economica*, vol. 31, Feb. 1964. N. Rosenberg, 'Adam Smith on the Division of Labour: Two Views or One?', *Economica*, vol. 32, May 1965.), つまり、以上みてきたような分業の積極的な効果についてのスミスの

以上のように、スミスによれば、分業の結果、技能の増進、労働の強化、機械の発明がもたらされ、労働の生産力が向上させられることとなる。¹³⁾このように、スミスは、労働の分割による労働の細分化、専門化に力点をおいて、労働の熟練、労働の強化、機械の発明という三つの事情から、分業が労働の生産力に及ぼす効果を強調するのであるが、他面、かれは、つぎのことも指摘する。すなわち、「文明が進み繁栄している国」¹⁴⁾では、完成品としての多くの必需品、便益品やそれらをつくるための道具、機械は、「多数の職人の結合労働(joint labour)の生産物」¹⁵⁾である、ということである。このことを説明するために、スミスは、たとえば日雇労働者の粗末な毛織物の上着を例にとり、それが、牧羊者から仕上工にいたるまでの多数の人々、さらに、商人、運送人その他の人々のさまざまな労働が結合される結果もたらされたものであるとし、「文明社会の最も下層の者にたいしてさえ、何千人という多数の助力と協同(co-operation)がなければ、手軽で単純な様式だとわれわれが誤って想像しているような普通の暮しぶりですらととのえてやることできない」¹⁶⁾と

(前頁より続く)

議論と第五編での分業の弊害についての議論との関係、さらに、E.G. ウェストと R. ラムとのあいだで論争されているスミスにおける分業と労働疎外の問題(E.G. West, 'The Political Economy of Alienation: Karl Marx and Adam Smith' *Oxford Economic Papers*, vol.21, Mar. 1969. R. Lamb, 'Adam Smith's Concept of Alienation', *Oxford Economic Papers*, vol.25, July 1973. E.G. West, 'Adam Smith and Alienation: A Rejoinder', *Oxford Economic Papers*, vol.27, July 1975. さらに、D.A. Reisman, *Adam Smith's Sociological Economics*, Croom Helm London, Barnes & Noble Books. New York, 1976, pp.143-161.) などの諸問題を考察の範囲に入れた研究は、筆者の今後の課題として残される。

13) 以上のことを示したスミスは、それにつづいて、「よく統治された社会では」、分業をつうじて生産物が増加させられ、「人民の最下層にまで広く富裕がゆきわたる」と述べる。すなわち、かれによれば、分業の結果、各職人の生産物が自分自身の直接的な必要を超えるほどに増加し、その余剰の生産物をたがいに交換することによって「豊かさが一般に社会の種々の階級のすべてにゆきわたる」とされるのである(W.N., p.11. 大河内訳, 1, 20-21ページ)。

14.15) W.N., p.11. 大河内訳, 1, 21ページ。

16) W.N., p.12. 大河内訳, 1, 22ページ。

述べるのである。

そして、労働の分割と結合が（十分にではないが）行なわれているところとしてのヨーロッパについて、かれはつぎのように述べる。「たしかに、身分や地位の高い人たちの法外な贅沢にくらべると、労働者たちの暮らしりは、疑いもなく大いに単純で手軽に見えるにちがいないが、それでも、おそらくつぎのことは真実であろう。すなわち、ヨーロッパの君主の暮らしりが勤勉で儉約な農民のそれをどれほど凌いでいようと、その程度は、この農夫の暮らしりが、一万人もの裸の野蛮人の生命と自由の絶対的支配者であるアフリカの多数の王侯の暮らしりを凌ぐほど大きいとはかぎらない、ということである」¹⁷⁾。

以上が第一編第一章におけるスミスの議論の骨子である。ところで、以上の議論における一つの特徴は、よく指摘されるように、たとえばピンを製造する作業場にみられるような分業（作業場内分業）から社会の内部での職業分化（社会的分業）の発生を説明し、しかも、同じ分業という言葉で、作業場内分業と、たとえば日雇労働者が着る上着の例にみられるような社会的分業とがあらわされているということである。

社会的分業そのものは、商品生産の存否にかかわらず、さまざまな社会経済の構成のもとにあらわれうるものであるが、人間社会における労働生産力が一定の発展段階に達し、しかもなんらかの形で私的所有の関係が成立した段階において、余剰生産物の交換を契機として、商品生産という形態で行なわれる社会的分業があらわれた。¹⁸⁾ もちろんこのような形態での社会的分業が広い経済領

17) W.N., p.12. 大河内訳, 1, 22-3ページ。

18) 分業は、1) 一般的分業（農業、工業などのような大きな属への社会的生産の分割）、2) 特殊的分業（諸々の種および亜種への生産上のこれらの属の区分）、3) 個別的分業（一作業場内の分業）に区別することができる。1)および2)は社会的分業である。（都留重人編、岩波小辞典『経済学』、岩波書店、1960年、分業の項。）

なお、分業のいっそうの分類については、たとえば、関弥三郎「アダム・スミスの分業論」『法と経済』（立命館大）第111号、1950年、52-4ページ、福田徳三「経済学原理」、改造社、1928年、551ページ、伊藤勉『分業論と社会政策』、関書院、1954年、15-8ページ、難波巖二「アダム・スミスの『分業論』の一研究——国富論研究（其の1）」『商経雑誌』（関西学院）第8号、1939年、155-9ページ等も参照されたい。

19) この間の事情については、高橋順三郎「A・スミス『国富論』における理論構造の一考察」（上）『立教経済学研究』第29巻2号、1975年、62-5ページを参照されたい。

域を支配するのは長い時間の経過の後であったが、経済の自給領域の縮小、交換経済の領域の拡大、したがって生産活動における商品生産の占める比重の増大といった事情に呼応して、この社会的分業も進展し、またこの社会的分業の進展は、交換経済を拡大させ、商品生産を増大させた。これにたいし、一作業場内において、生産工程を分割し、分業にもとづく協業という形で行なわれる労働形態、つまり、作業場内分業は、すでに特定の発展程度まで成熟している社会的分業を前提条件とするのであり、そして、この作業場内分業がはじめて本格的に発展したのは、資本主義的生産様式の一つとしてのマニファクチュアの形態においてであった。²⁰⁾そしてまた、マニファクチュアにおける作業場内分業によって商品生産は大幅な発展をとげたのであった。このような意味で、作業場内分業から社会的分業の発生を説明することは、歴史の継起とは逆の説明をあたえることになる、といえるであろう。²¹⁾

他方、マニファクチュア時代の社会哲学者といわれるスミスのいう職業分化すなわち社会的分業は、以上の議論からもわかるように、その内実は、商品生産による社会的分業であるが、かれは、この社会的分業と作業場内分業とを同じ分業という言葉で表現し、それらのあいだの区別、²²⁾関連を明確な形では示していない。

もっとも、かれは、第一編第八章の末尾においてであるが、つぎのように述べている。「労働の賃金が上昇すると、賃金となる価格部分が増加し、多くの商品の価格が必然的に高まる。そしてそれだけ、国の内外におけるこれら商品の消費は減ることになる。けれども労働の賃金を引き上げると同一の原因である資本の増大は、²³⁾労働の生産力を増進させ、より少ない量の労働でより多い量の製品を生産させる傾向がある。多数の労働者を雇用する資本の所有者はと

20) 伊藤迪, 前掲書, 59ページ。関弥三郎, 前掲論文, 62ページ。

21) 小林昇『国富論体系の成立』, 未来社, 1973年, 49ページ。

22) もっとも、スミスが指摘しているように、作業場内分業の発達は、社会的分業を進展させる傾向をもつ。商品生産による社会的分業のばあいは、作業場内分業の発達は、市場を媒介して、社会的分業の進展を促進する傾向をもつ。この意味でのこれら二つの分業の相互連関的な発達の可能性については、本稿脚注50を見られたい。

23) なお、伊藤迪氏は、前掲書第3章第2節において、『国富論』第三編を中心に考察することによって、スミスにおける作業場内分業と社会的分業との区別およびそれらの関係を、論究している。

うぜん、自分の利益のために、達成可能な最大量の製品が生産できるように、仕事の適切な分割と分配とを行なおうとつとめる。これと同じ理由から、かれは、自分なり労働者なりが考え及ぶ最善の機械類を労働者に供給しようとしてつとめる。個々の作業場における労働者間に起こることは、同じ理由から、社会全体の労働者間にも起こる。労働者の数が多くなればなるほど、かれらはますます仕事のさまざまな種類や小部門に自然に分かれる。ますます多くの人々が、各自の仕事を遂行するうえにいちばん適切な機械類の発明に専念し、したがってまたそういう機械類が発明される見込みもいっそう大きくなる。それゆえ、こうした改善の結果として、多くの商品がいままでよりもずっとわずかな労働で生産されるようになり、労働の価格の騰貴を相殺してあまりあるほどになるのである。²⁴⁾ この文章のなかに、分業と資本の関係、個々の作業場における作業過程の分割つまり作業場内分業と、一つの社会全体のなかでの職業分化つまり(商品生産による)社会的分業との関係についての、スミスの認識をみることができるのであるが、この文章は、スミスにおいては、二つの分業の存在は認識されてはいるが、それら二つの分業の発達のあいだにはなんの区別もなきれず、そして、二つの分業は規模的に異なるだけで原理的にはまったく同一のものとしてとらえられているということを示している。二つの分業についてのこのような把握は、スミスをしてこの二つの分業の基本的、²⁵⁾ 対立的性格を析出

24) *W.N.*, p.86. 大河内訳, I, 147ページ。

25) 商品生産が行なわれる場所としての作業場の内での分業と商品生産による社会的分業という二つの分業の基本的な相違点は、以下の五点に整理して考えることができる。

第一に、作業場内分業は一作業場内部での分業であり、ここでの労働の分割は、作業場内での個々の作業への分割である。これにたいし、商品生産による社会的分業は、独立の生産単位間での分業であり、ここで分割される労働は、一生産単位全体としての総体的労働と他のそれとの分割である。

第二に、作業場内分業においては、分割された作業に従事する各々の労働者は一連の作業場内分業を担う部分労働者であり、かれの生産する生産物はそれ自体一つの商品ではなく、その部分労働者の共同生産物が一つの商品となるのであり、各部分労働者は商品生産者、商品所有者ではない。これにたいし、商品生産による社会的分業においては、その分業の直接的な構成員は、生産主体(事業主)であり、かれらは商品生産者、商品

するための視点を失わせることとなるのであるが、同時にそれはまた、かれの

(前頁より続く)

所有者としてこの分業に参加する。

第三に、作業場内分業が行なわれるためには多数に分割された各々の作業に従事する労働力が必要となるのであり、一作業場内への労働者の集合があってはじめて作業場内分業は成立しうる。作業場内分業は事業主による労働力の購入によって、つまり、さまざまな労働力がそれらを結合労働力として使用する一事業主に売られることによって、可能となる。この意味で、作業場内分業は事業主による労働力の購入によって媒介される。それにたいし、商品生産者間の社会的分業は、各々の事業主すなわち商品生産主体、商品所有者のあいだの、商品としての生産物の交換、売買によって媒介される。

第四に、作業場内分業は生産手段が個々の事業主にある程度集中していることを前提にする。これにたいし、商品生産という形態における社会的分業は、多数の独立の商品生産者への生産手段の分散を前提にする。すなわち、商品生産者(事業主)のあいだの社会的分業は、個々の商品生産者が各々別個の商品を生産し、それらの商品が相互に交換されることによって成立しうるのであるから、商品生産者間の社会的分業の成立のためには、個々の商品生産者が集積された生産手段を所有していることが必要であるとともに、その社会的分業が大規模なものであるためには、生産手段を所有する商品生産者が広汎に存在すること、すなわち生産手段の広汎な分散が必要となる。

第五に、作業場内の各作業のあいだには商品交換の関係はなく、各作業は事業主によって一定の計画に従って組織される。すなわち、生産手段を所有し労働者を雇用する事業主は、経済原則あるいは利潤極大化原則に従って、その生産活動を最も効率的に営もうとする。それゆえ作業場内の生産活動においては、そのような最も効率的な生産活動を達成するための計画に従って、生産要素の購入、配置がなされ、生産が行なわれる。そこでの分業は、事業主の一つの統一的な意志に従って、組織的、計画的に編成され、生産は、計画的に行なわれる。したがって、この分業の進展は、計画性と資本の専制を顕在化させるという可能性をもつ。

これにたいし、商品生産という形態における社会的分業には、作業場内分業でみたような意味での統一的な意志は存在しない。この分業の直接の構成員は、各々各自の生産手段と商品を所有する独立した商品生産者(事業主)である。この意味で、かれらのあいだの関係は、たがいに自由で平等なものであり、かれらは競争の権威にのみ従う。したがって、商品経済が純粹なものであればあるほど、またこの分業が進展すればするほど、各商品生産者およびその生産手段の諸部門への配置、したがってまた、社会全体としての生産には、無計画的性格がいっそう強まり、そこでは、諸生産部門のあいだの均

分業把握の独自性を示すものでもある²⁶⁾。すなわち、このような分業把握に対応して、第一章では、すでにみたように、かれは、「社会全般の仕事にたいする分業の効果を比較的容易に理解するためには、^{マニユファクチュア} どれか特定の製造業をとって、そこで分業がどんなふうに行なわれているかを考察してみるのがよいだろう」とし、ピン製造業における作業場内分業の効果を例示し、それにつづいて、作業場内分業から（商品生産という形態における）社会的分業の発生という無理な説明をするのであった。つまりここでは、社会的分業から作業場内分業ではなく、作業場内分業の同心円の拡大延長線上²⁷⁾に社会的分業がとらえられているのである。そして、商品生産という形態での社会的分業による社会的生産力の増進は、小さなピン製造業という特定の製造業での（作業場内）分業による生産者一人当たりの生産量の増大を明らかにすることによって、より容易に知られると考えられているのである。したがってここでスミスにとって重要な関心事は、二つの分業の区別、関連ではなく、作業場内分業と社会的分業に共通する生産力の上昇という効果を取り出し、作業場内分業をみることによってより容易に理解することのできるころの社会的分業による社会の生産力の上昇を説明することにあるのである。そしてかれは、作業場内分業の要素と社会的分業の要素とをおりませながら、労働の分割による労働の細分化、専門化に力点をおいて、労働の熟練、労働の強化、機械の発明という三つの事情から、分業が労働の生産力に及ぼす効果を説明するのであった。

作業場内分業の例を援用することによって社会的分業の労働生産力増進効果

（前頁より続く）

衡は、交換、市場をつうじて事後的、傾向的のみに達成され、無計画と無政府性という性格が顕在化する可能性をもつ。（富塚良三「スミス蓄積論の基本構成」〈内田義彦編『古典経済学研究』上巻、未来社、1957年、所収〉156-8ページ。遊部久蔵「分業と交換」〈高島善哉編『経済学説全集 第2巻 — 古典学派の成立 —』、河出書房、1955年、所収〉121-3ページ。内田義彦、前掲書、218-9ページ。伊藤迪、前掲書、59ページ、67ページ。大畑信行「経済配分の問題」〈『経済学研究』——福田徳三博士追憶論文集——、森山書店、1933年、所収〉148-50ページ。）

26) 岡田純一「『国富論』における分業と価格機構」『東洋経済』——国富論200年特集——、1976年、78-9ページ。

27) 岡田純一、前掲論文、79ページ。

を、労働の分割という点から示したスミスは、それ以後は、もっぱら社会的分業にかかわる議論を展開する。つまり、労働の分割による利益を強調したスミスは、つぎに、文明社会では多くの消費財や生産者財はさまざまな労働が結合されることによって作り出されることを指摘し、分割された労働の結合ということを問題にするのであったが、そのときには、先にみた例からもわかるように、経済的に別個の生産単位を構成する人間（たとえば牧羊者、羊毛の選別工、商人、運送人などといったように）の労働の結合すなわち別個の独立した生産単位相互間の労働の結合を指摘しているのであり、そこでは、経済的に独立した生産単位としての作業場のなかにおいて、一つの商品としての生産物を生産するために、事業主の統一的な意志に従って、計画的に、全体の労働過程が分割され、そこに部分労働者としての個々の労働者の労働が投入されることをつうじて生産活動が営まれるといった、いわゆる分業にもとづく協業という意味での労働の結合がいわれているのではないのである。ここではもはや、作業場内における部分労働によってなされる労働の結合が問題にされることなく、作業場内での労働の分割と同様の生産力の上昇という利益をもたらして作業場内での分業と同一の原理から発現したものとしてスミスに把握されている社会の内部での仕事の分割、社会的分業（しかも商品生産という形態による社会的分業）によって、一見個々的に行なわれている労働が、社会的な労働に結合されているということが指摘されているのである。²⁸⁾

すなわち、スミスにとっては、マニュファクチュアにおける分業はそこでの労働の生産力を飛躍的に上昇させるのであるが、これと同じ分業が社会の内部に、一見明瞭ではないが、しかしはるかに広汎に存在し、そしてそこにおいては、労働は外見上個々的に行なわれているようにみえるが、実は巨大な社会的労働に結合されており、この細分化され専門化されしかも社会的に結合された労働によって人間が自然に働きかけること、そのことが、文明社会の生産力と富裕の基礎とされるのである。²⁹⁾

28) したがって、ここでのスミスの議論では、作業場内分業における協業の側面に触れていないにもかかわらず、商品生産のゆえに協業的契機が存在しない商品生産という形態による社会的分業に協業的側面が求められているのである。（遊部久蔵，前掲論文，119-21ページ。）

29) 内田義彦，前掲書，232-3ページ。渡辺一郎『経済学説の史的研究』，三省堂，

このようにスミスにおいては、細分化され専門化された労働が社会的に結合される時、また、そのときにのみ、その分業労働は社会の生産力を高めるのであり、そして、このような形で行なわれる分業は、社会の一般的な富裕を高めうる基礎となるのであった。このような意味における分業の生産力および富裕に及ぼす効果を強調したスミスは、第一編第二章において、分業そのものをひきおこす原理の考察へと進む。

Ⅱ 分業と交換と交換性向

第二章の冒頭においてスミスは、「こんなにも多くの利益を生むこの分業は、もともと、それによって生じる社会全般の富裕を予見し意図した人間の知恵の所産ではない。分業というものは、こうした広い範囲にわたる有用性に無頓着な、人間の本性上のある性向、すなわち、ある物を他の物と取引し、交易し、交換しようとする性向の、緩慢で漸進的ではあるが、必然的な帰結なのである³⁰⁾」と述べる。

すなわち、すべての人間にまた人間のみはこの「取引し、交易し、交換しようとする性向」がそなわると考えるスミスによれば、この性向は、人間をして交換、取引に導くことにより各人が必要とする他人からの助力をたがいに受け取り合うことを可能にするとともに、この性向に裏づけられた交換、取引の確実性が各人をして特定の職業に専念するよう促す、とされるのである。つまり、スミスによれば、文明社会における人間〔つねに多くの人々の協力と援助を必要としているにもかかわらずあらゆる機会に「卑屈な媚へつらいの動作³¹⁾で」他人からの好意を獲得するほどの時間のゆとりをもたず、また、「全生涯をかけても、少数の人々の友情をかちえることさえやつのことである³²⁾」人間〕が、その必要とする仲間からの助力を獲得するためには、仲

(前頁より続く)

1935年、32ページ。

30) *W.N.*, p.13. 大河内訳, I, 24ページ。

31) *W.N.*, p.14. 大河内訳, I, 25ページ。

32) *W.N.*, p.14. 大内・松川訳, I, 82ページ。

間の博愛心だけに期待しても無駄であり、「むしろそれよりも、もしかかれが、自分に有利となるように仲間の自愛心を刺激することができ、そしてかれが仲間³³⁾に求めていることを仲間がかれのためにすることが、仲間自身の利益にもなるのだということを、仲間³³⁾に示すことができるなら、そのほうがずっと目的を達しやすい。」すなわち、人間は、たがいに、交換性向を表現する言葉、「私の欲しいものを下さい。そうすればあなたの望むこれをあげましょ³⁴⁾う」という相手の自愛心に訴える言葉で取引、交換を申し出て、それを行なうことによつて、つまり契約による交換を行なうことによつて、自分たちが必要とする他人からの助力の大部分をたがいに受け取り合うとされるのである。

そしてまた、この交換性向に裏うちされる人間生活にとってかくも重要な取引、交換の確実性が、人々のあいだに分業をひきおこすとされる。スミスは、狩猟民や牧羊民の種族のなかにおける分業の発生を例にとりあげ、つぎのよう³⁵⁾にいう。「狩猟や牧畜を営む種族のなかで、ある特定の人物が、弓矢をほかのだれよりもすばやく巧妙に作るとしよう。かれは弓矢を、しばしば仲間たちの牛や羊や鹿の肉と交換し、そしてついには、このようにするほうが、自分で草原に出てそれらを捕えるよりもいっそう多くの牛や羊や鹿の肉を手に入れることができる、ということ³⁵⁾をさとるようになる。こうして自分自身の利益にたいする関心から、弓矢作りがかれのおもな生業になり、かれは一種の武器作りとなるのである。」そして、このようなことは他の職業についてもあてはまるとし、「こういうわけで、人はだれでも、自分自身の労働の生産物のうち自分の消費を超える余剰部分を、他人の労働の生産物のうちかれが必要とする部分と交換することができるという確実性によつて、特定の業務に専念するよう促される。また、その特定の業務にたいしてもっている才能や天分がなんであれ、それを育成し完成させるように力づけられるのである³⁶⁾」とされる。

さらに、人間の生得の才能の差異は小さいもの³⁶⁾と考えるスミスによれば、この交換性向は、交換→分業をひきおこすことをつうじて、分業による仕事の差

33) *W.N.*, p.14. 大河内訳, I, 25-6ページ。

34) *W.N.*, p.14. 大河内訳, I, 26ページ。

35) *W.N.*, p.15. 大河内訳, I, 27-8ページ。

36) *W.N.*, p.15. 大河内訳, I, 28ページ。

異から、異なる職業にたずさわる人々の才能のあいだに大きな差異をひきおこす。³⁷⁾と同時に、この性向はそのようにして生じる才能の差異、多様性を人間にとって有利なものにする。すなわち、「人間のあいだでは、はっきり違った天分がたがいに役に立つのである。すなわち、取引し、交易し、交換するという一般的性向のおかげで、人間のそれぞれの才能が生みだすさまざまな生産物は、いわばひとつの共同の資財^{ストック}となり、だれでもそこから、他の人々の才能の生産物のうち自分の必要とするどんな部分でも購入することができるからである。」³⁸⁾

つまり、人間が自愛心、交換性向をもつことにより交換が可能となり、自愛心と交換性向にもとづく労働の生産物の交換が確実なものとされることから、各人が同じく自愛心にもとづいてなんらかの職業に専念するという分業が発生し、この分業によって、従事する仕事をつうじて人々のあいだに異質的な能力が後天的に養成され、その養成された異質的な能力によって、多種多様な（そしてより多くの）生産物が生産されることとなり、その結果、各人は、自愛心と交換性向にみちびかれながら、（より多くの）自己の労働生産物を、（より多くの）より多様な他の人の労働生産物と交換することによって、必要や好みに応じた生産物を（より豊かに）獲得することができる。そしてこの意味で、才能の差異が人間にとって有利なものである、とされるのである。

以上が第一編第二章の内容であるが、そこでの議論からもわかるように、スマスのいう「交換性向」とは、「私の欲しいものを下さい、そうすればあなたの望むこれをあげましょう」という相手の自愛心に訴えて私的交換をひきおこ

37) 「人それぞれの生れつきの才能の違いは、われわれが気づいているよりも、実際はずっと小さい。さまざまな職業にたずさわる人たちが、成熟の域に達したときに、一見他人と違うようにみえる天分の差異は、多くの場合、分業の原因だというよりもむしろその結果なのである。……（このことは）たとえば学者と街のありふれた荷かつき人足とのあいだの差異についても（あてはまる。）……ところで、取引し、交易し、そして交換するという性向が人間になかったなら、だれでも、自分の求める生活の必需品と便益品をことごとく自分で調達しなければならなかったにちがいない。すべての人が、同一の義務を果たし、同一の仕事をしなければならなかったにちがいない。そして、才能の大きい違いをもっぱらひきおこすような仕事についての違いは、生じ得なかったであろう。」

（*W.N.*, pp.15-6. 大河内訳, I, 28-9ページ, 括弧内引用者）

38) *W.N.*, p.16. 大河内訳, I, 30ページ。

す言葉で表現され、それは、「理性と言葉という人間能力」³⁹⁾をつうじて人間交通関係としての社会がつくられその社会生活の一断面としての経済生活のうちに現われ、人間生活の日々の仕事のなかで生起、発展するものである、と考えられることもできるであろう。⁴⁰⁾

しかしながら、「交換性向」をそのようなものと解釈するとしても、その交換性向、自愛心、それらにもとづく私的交換から説明される分業は、作業場内分業ではなく社会的分業として把握されるべきものであり、しかもその社会的分業は社会的分業一般ではなくて、商品を生産し保有する商品生産者間の社会的分業であるといえるであろう。なぜなら、社会的分業一般は、かならずしも、商品生産が行なわれなくとも、売買という私的交換がなくとも、成立しうるからである。⁴¹⁾つまり、スミスがここでその起源を求めようとしている分業は、実

39) *W.N.*, p. 13. 大河内訳, 1, 24ページ。

40) 山崎恰「アダム・スミスの経済発展論」(I) 『経済学論叢』(香川大)第36巻5号, 1963年, 211ページ。福田敬太郎「アダム・スミスの『交易性向』について」『名古屋学院大学論集』第2号, 1965年, 6ページ。

41) 谷口弥五郎『アダム・スミスの経済思想』, 同文館, 1923年, 199-200ページ。難波巖二, 前掲論文, 149-50ページ。E. Roll, *A History of Economic Thought* Kinokuniya Asian Edition, 1975, pp.154-5, 隅谷三喜男訳『経済学説史』(上)有斐閣, 1970年, 197-8ページ。

なお、K. ポラニー(K. Polanyi)によれば、(社会的)分業は社会と同じだけ古い現象であり、それは、性別、地理、個人的才能という諸事実内に内在する差異から生じるものであり、「バーター・取引・交換という人間の性向などはまったくもって疑わしいものである」とされる(カール・ポラニー著、吉沢英成、野口建彦、長尾史郎、杉村芳美訳「大転換 — 市場社会の形成と崩壊 —」, 東洋経済新報社, 1975年, 58ページ, 375ページ)。さらにかれば、利益や取引の動機、交換性向を支配的な原理としないで組織された複雑で大規模な経済システムが存在したことを指摘する(前掲書, 第2部第4章)。

もちろん、作業場内分業は、直接的には、商品の私的交換によって基礎づけられるものでも媒介されるものでもない。作業場内分業は、一生産単位内部における分業であり、作業場内分業での労働の結合は、交換によるのではなく、生産主体(事業主)の支配によってなされる。それにたいして商品生産者間の社会的分業は、独立の生産主体が社会的富の生産を分担する分業であり、商品としての、一完成品あるいはその一部分の生産を職業として専念するものであり、この社会的分業は、生産主体間の私的交換、売買をつうじて結合される。

質的には、人間社会の労働生産力の発達のもとに、直接に消費される以上の余剰生産物および市場が存在し、それらを基礎づけるものとしての私的所有の安全、所有権が確立され、自給経済にたいするものとしての流通経済が確立しているという条件が満たされるときに、広く行なわれるであろうところの商品生産者間の社会的分業なのである。そして、そこでは、「交換性向」は現実十分に働くとも考えることも可能であろう。「こうした広い範囲にわたる有用性には無頓着な、人間の本性上のある性向、すなわち、ある物を他の物と取引し、交易し、交換しようとする性向の、緩慢で漸進的ではあるが、必然的な帰結」とされる分業は、実質的には、分業一般ではなくさらに社会的分業一般でもなく、商品生産という形態における社会的分業なのであって、交換性向、自愛心とは、この分業に参加する商品生産者（生産主体）の心的基礎の一つをさすものと考えられるべきものである。したがって、ここでは、スミスは、いまみた商品生産による社会的分業が行なわれるための条件に触れることなく、あるいは、それらの条件が満たされたものとして、かれなりに、分業の一特殊形態としての商品生産者間の社会的分業をひきおこす心的契機を示したことになる。

他方、スミスによれば、交換性向、自愛心にもとづく分業による仕事の差異をつうじて、異なる職業にたずさわる人々のあいだに異質的な才能が後天的に養成されるのであった。したがって、本稿Ⅰでみたスミスの議論を考え合わせれば、分業によって養成されたその各々の能力は、その特定の職業に専念すればするほど向上し、そして、各々の職業部門において、（作業場内分業と同様の）労働の生産力の向上という効果をつうじて、労働生産物を増大させ、生産者の余剰生産物を増大させるであろう。そして、さまざまな職業におけるこの増大した余剰の労働生産物は、スミスによれば、交換性向のゆえに、「共同の資財」のなかにもちこまれ、そしてこの「共同の資財」から、個々の人間は、かれの必要とするものを購入することができるのであった。分業の結果、より多量のそしてより多様な生産物が社会に存在することとなり、各人は、各自の増大し

42) スミスは、『国富論』第一編では、個々の生産主体における直接の消費を超える資財と、市場との存在、それらを基礎づける所有権の確立といった条件が与えられたものとして、論議を展開する。この間の事情については、内田義彦、前掲書、136-9ページを参照されたい。

た労働生産物を、他人の増大した労働生産物と契約にもとづいて交換することによって、必要とする生活手段をより豊富により多様に、獲得することができるのである。

したがって、スミスにおいては、細分化され専門化された異質な私的労働が、契約による労働生産物の私的交換によって、社会的労働に結合され、⁴³⁾ そのようにして結合された分業労働が社会の生産力の基礎となるのであり、また、このような交換による労働の結合が可能であるからこそ、人間労働の細分化、専門化、異質化が可能となるのである。⁴⁴⁾ この意味で、契約による労働生産物の私的交換は、かれのいう分業の基礎となるものであった。したがってまた、この分業の進展は、交換からの制約を受けながらも、社会の生産力を増進させながら、社会の交換領域を拡大、深化させ、交換を助長するといったように、この分業と交換は相互連関的に発展する可能性をもつものである。

ところで、スミスは、このような交換もそれにもとづく分業も、交換性向、自愛心から生ずるものとするのであった。すなわち、分業は、交換性向に裏うちされた労働生産物の交換の確実性のもとに、自己の利害にたいする関心から生じるのであり、交換性向に由来するとされる交換は、相手の自愛心に訴えることによって、契約にもとづいて行なわれるのであり、そしてこのような交換、取引によって、「自分たちの必要としている相互の助力の大部分をたがいに受け取り合う⁴⁵⁾」のであった。したがってスミスにおいては、社会の物質的富裕の基礎をなす分業も、その分業労働を社会的労働に結合し、富裕をゆきわたらせ、人間に必要な相互の助力をもたらす交換も、その心的基礎は、一方で他者への利他的心情にでなく、他方で他者からの強制にでなく、ただ、交換性向、自愛心に求められるのであった。

このように分業（商品生産者間の社会的分業）と私的交換とにおける交換性

43) さきにみたように、スミスは作業場内分業に言及してはいるが、第一章から第三章までのスミスの議論には、労働の結合は契約による労働生産物の私的交換にしか見い出せない。このことから、そこで議論されている分業論は、商品生産者間の社会的分業論であることがうかがえる。

44) 内田義彦，前掲書，231-4ページ。

45) *W.N.*, p.15. 大河内訳，I，27ページ。

向、自愛心のもつ意味を強調し、細分化され異質化された労働が私的交換をつうじて結合され、その分業労働が社会の生産力と富裕の基礎となり、交換が分業の基礎となることを示したスミスは、つづく第三章で、分業の程度を規定するものとしての、市場の問題に触れる。

Ⅲ 分業と市場の大きさ

第三章の冒頭で、スミスは、「分業をひきおこすのは交換しようとする力であるから、分業の大きさも、この力の大きさによって、いいかえると市場の大きさによって、制限されるにちがいない。市場がごく小さい場合には、どんな人も、一つの仕事にだけ専念する気持にはとてもなれない。というのは、自分自身の労働の生産物のうち自分の消費を上回る余剰部分のすべてを、他の人々の労働の生産物のうち自分が必要とする部分と交換することができないからである。」⁴⁶⁾と述べ、その例証として、大都市という大きな市場でしか営まれえない職業（たとえば荷かつぎ人足という職業）、「スコットランドのハイランドのような人里離れた地方に点在する孤立した家々や小さな村々」⁴⁷⁾の農業者が行なわざるをえないさまざまな種類の仕事（たとえば肉、パン、酒などを自給するための仕事）、農村の職人による分化度の低い仕事（たとえば、「農村の大工は、木でできているあらゆる種類の仕事を一人で行ない、農村の鍛冶屋は、鉄でできているあらゆる種類の仕事を一人で行なう。」）⁴⁸⁾、また、市場の不足のために「スコットランドのハイランド地方の僻遠の内陸地方では、釘作りのような職業ですら、一個の職業となりえない」⁴⁹⁾といった事情をあげる。

他方、スミスは、この章では、陸上輸送にたいするものとしての、水上輸送という輸送方法による市場拡大効果、および、この輸送方法を利用しえない地域に比べての、この方法を利用しうる地域における技術や産業の改善の先行性を強調する。すなわち、水上輸送によって、陸上輸送によるよりも、低費用で（しかもより安全に）貨物を輸送しうるために、国の内外いずれについてもこ

46),47) W.N., p.17. 大河内訳, 1, 31ページ。

48) W.N., p.17. 大河内訳, 1, 32ページ。

49) W.N., p.18. 大河内訳, 1, 32ページ。

の水上輸送で結ばれる両地域はたがいに市場を提供しあうことにより、たがいの労働生産物にとっての市場が拡大され、商業活動が高められ、両地域における技術や産業の改善への刺激が与えられるというのである。

以上が第二章をうけて展開される第三章での議論の骨子であるが、第二章との脈絡からみても、また、第三章についての以上の要約からみても、この章であつかわれている問題は、作業場内分業と商品生産者間の社会的分業のうち、直接的には、後者の方の分業にかかわるものである、といえるであろう。

このことは、市場にたいするこれら二つの分業の関係をみることによって確かめられうるであろう。

すでにみたように、独立の商品生産者が社会的富の生産を分担する分業である商品生産という形態による社会的分業における結合は、私的交換、売買によってなされるのであったが、商品としての、一つの完成品あるいはその一部分の生産を職業として専念することは、その生産物の販売が可能で一定の利得（利潤あるいは生活資料）を獲得しうるということが確実となつてはじめて可能である。したがって、交換力＝市場の存在は、この社会的分業が成立するための必須の条件の一つである。他方、交換力の発展による交換される生産物の量の増大は、この社会的分業の内容をより豊富にし、また、その程度を深化させる。この意味で、交換の程度＝市場の大きさは、直接的に、成立すべき分業の内容、程度を規定する。もっとも、商品生産における作業の性質および生産技術の発達度はこの社会的分業の内容および程度に影響を及ぼすが、それらの影響は、市場の大きさによって与えられる社会的分業の発達の可能性の範囲内において、社会的分業がとる具体的形態を規定するものとして作用するにすぎないのであり、商品生産者間の社会的分業は、直接的には、交換の程度＝市場の大きさによって規定されるのである。これにたいして、すでにみたように、一生産単位内部における分業としての作業場内分業によって分割される労働の結合は、交換によってではなく、事業主の支配によってなされるのである。したがって、この分業の成立、発展は、直接的には、市場の大きさから説明されるべきものではなく、事業主の作業場運営についての考慮から説明されるべきものである。もっとも、この分業は、事業主の支配によるのではあるが、それは、一生産物の生産に必要な諸作業についての分業であるため、その生産物を生産する生産技術の水準によっても規定される。さらに、作業の細分化は、より多

くの労働者を雇用するために必要な生活資料、原料、道具、機械などを必要とするため、資本の面からの制約も受ける。したがって、社会的生産の一部を分担する一生産単位内において作業場内分業がどのような形態をとるかは、事業主が、経済原則あるいは利潤極大化原則にそって、所有資本の範囲内で生産費との関連において、所与の諸生産技術のうちもっとも有利なものを選ぶことによって決まると考えうる。もっとも、生産技術の有利性は、市場の大ききとの関連においてはじめて決まるものであり、この意味で、作業場内分業は市場とは無関係ではありえない。だが、作業場内分業は、いま意味での生産技術をつうじて市場に適應するのであり、この分業は、直接的には、生産技術によって決まるのであって、交換の程度＝市場の大ききは、ただその作業の全体としての大ききを規定するだけである。したがって、作業場内分業の、交換＝市場⁵⁰⁾にたいする関係は、いわば、間接的なものである。

50) 関弥三郎、前掲論文、62-3ページ。中山伊知郎『スミス国富論』、岩波書店、1938年、31-2ページ。このように、商品生産者間の社会的分業は、直接的に、そして作業場内分業は、間接的に、市場の大ききによって制約されるのであるが、これら二つの分業は、また、作業場内分業によってつくり出された生産物の総量が市場を媒介とすることによって社会的分業の構成員のあいだに分配されるという意味で、市場をつうじて交渉する。さらに、これら二つの分業は、市場を媒介とすることによって、商品生産者間の社会的分業の発達に作業場内分業の発達を促進し、また逆に、スミスが指摘したように作業場内分業の発達が社会的分業の発達を促進するといったように、相互的な関係において発達しうるのであり、これら二つの分業は相互依存的な関係にある。たとえば、市場の大ききという制約をうけながらも、それが許す範囲内で商品生産者間の社会的分業が進展するとき、各事業主による各々の利得への配慮と市場におけるかれらのあいだの競争は、各事業主をして、より安価な商品をより大量に提供しうよう作業場内分業を成立、発達させる。また、作業場内分業の発達は、たとえば、そこで使用される道具、機械、半製品といった生産手段の生産のための新しい市場を提供することにより、作業場内における一連の分業の一過程の自立化、独立化を生み出し、商品生産者間の社会的分業を推進し、その結果、社会的分業における相互依存的関係と、事業主間の競争を、いっそう強化し、それはまた作業場内分業の発達を促進させる。(高橋順三郎、前掲論文、55ページ。関弥三郎、前掲論文、63-4ページ。大河内一男『スミスとリスト』、日本評論社、1943年、178-9ページ。大河内一男「二つの分業」〈大河内一男編『国富論研究』(1)、筑摩書房、1972年、所収)47-8ページ。高島善哉『アダム・スミスの

したがって、第三章において、スミスは、直接的には、商品生産者間の社会的分業、つまり、小規模な作業場内分業を観察することにより容易に理解することのできる労働生産力増進という効果をもち文明社会の生産力と富裕の基礎をなすとかれが考える社会的分業が行なわれるためには、その一つの条件として、交換力＝市場が存在していなければならない、また、この交換力の程度＝市場の大小によって、この分業の程度が制約される（もっとも作業場内分業も市場の大小によって間接的に影響を受けるが）ということを示し、それに関連して、この分業の程度に影響を及ぼすものとしての市場の範囲を拡大させる効果をもつ交通の便（とくに水上輸送とそれらを可能にする河川、海洋）というどちらかといえば市場を支える外的な要因に言及したことになる、といえるであろう。

Ⅳ 結びに代えて

以上われわれは『国富論』の冒頭の部分におけるスミスの議論をみてきたのであるが、そこでみたように、かれは、富の具体的形態は「生活の必需品および便益品」でありその源泉は労働であるとし、そして、文明社会における富の生産力と（物質的）富裕の基礎を分業労働に求めた。すなわち、かれは、ある国の富裕の大きさに影響を及ぼす要因として、地味、気候、国土の広さといった自然的条件、労働人口、労働の熟練、技能、判断力、強度、さらに機械などの要因を考慮に入れながらも、自然的条件を所与のものとしてあつかい、その場合における富裕の問題を考察するのであった。つまり、富の生産における労働の支配的な役割を認めるスミスは、富裕の問題を、自然的条件そのものでなく、それに働きかける人間労働の問題としてとらえるのであった。しかもかれは労働の問題のうちなによりも労働の生産性を重視し、そして、その労働の生

（前頁より続く）

市民社会体系』、岩波書店、1974年、97-8ページ。）

なお、いうまでもなく、この脚注の後半を本稿脚注25と合わせ読めば、スミスより後の資本主義の本格的な発達もたらすこととなったといわれる問題の一端をうかがうことができるであろう。

産性の程度を根本的に規定するものとして分業という人間労働の組織形態をあげるのであった。すなわち、労働の熟練、技能、判断力、労働の強化、機械は、分業から派生する生産力の個別的諸契機⁵¹⁾としてあつかわれるのであった。分業は(作業場内におけるものも、社会の内部で職業分化として行なわれるものも)、労働の熟練、技能、強度、判断力などの人間の主体的能力を高め、さらに、機械を生み出すことによって、労働の生産性を高めることを可能にし、そしてこのような細分化され専門化された労働がたがいに結合されるとき、そこには、生産力の向上と富裕とが実現されるとするのであった。この意味で、分業は、スミスにおいては、自然的条件が所与のものとして与えられた場合における人間の富裕を増進させるための基本的な契機となるものであり、さらに、人間が享受しうる富裕にたいして自然的条件がもつ規定性そのものを、人間が主体的に緩和し、その規定性からみずからを解放するための挺子となるものであったといえる。そしてまた、この分業こそが、働く人々よりもはるかに大量の労働生産物を消費する多数の不労者の存在にもかかわらず、文明社会においては、最も貧しい階層の職人ですら、もしかれが[・][・][・]儉約家で[・][・][・]勤勉であるなら、どんな野蛮人が獲得しうるよりも多くの生活の必需品と便益品の分け前を享受することができる原因なのであった。

なお、スミスは、作業場内分業と社会的分業とを同一原理の二つの異なる表現としてとらえ、社会的分業の発達と作業場内分業の発達とを区別せず、この両者は先後の区別なく相ともなう現象であると把握していた。⁵²⁾『国富論』第一編第一章では、かれは、この二つの分業に共通にみられる労働の生産力に及ぼす効果を説明するのであるが、他方で、作業場内分業の利益の結果として職業の分化

51) 内田義彦、前掲書、227ページ。もっとも、たとえば本稿Ⅰで引用された第一編第八章の末尾の文章にもみられるように、スミスは、必ずしも、分業を生産力の基礎的契機として、技能、労働強化、機械＝道具を分業から派生してくる単なる「個別的契機」としてはいないともいえる(仲村政文「スミス分業論の再構成——生産力理論に即して——」『経済学研究』(九大)第31巻2号、1965年、92-4ページ)が、少なくとも第一編第一章においては、このような形でとらえられている。

52) 小林昇、前掲書、47ページ。

(社会的分業)が生じた、つまり、社会的分業の発生を作業場内分業から説明するという歴史の継起とは逆の説明をあたえるのであった。そして、分業による労働生産力増進の三つの事情を説明したのは、実質的には、社会的分業論、しかも商品生産者間の社会的分業論が展開され、作業場内分業に固有な諸問題や、作業場内分業と商品生産者間の社会的分業との対立的性格は問題にはされなかった。第一章の末尾において、細分化され専門化された異質労働がたがいに結合されるときに生産力の向上と富裕とが実現されるというとき、そこで説明されているものは、すでに、社会的に結合された社会的分業労働のことをいっているのであり、作業場内での部分労働の結合には触れられることはなかった。

個々の生産主体における直接の消費を超える資財と、市場との存在、それらを基礎づける所有権の確立といった条件があたえられたものとして、第一編での議論を展開するスミスは、第一編第二章「分業をひきおこす原理」において、それらの条件が形成される過程に触れることなく、実質的には、商品生産者間の社会的分業をひきおこしそれを支える生産主体の心的契機を追求する。そしてかれは、それを自愛心、交換性向に求めるのであった。そこでは、個々の人間が必要とする他人からの助力の大部分は、自愛心と結びついた交換性向にもとづく契約による私的交換をつうじて、相互に受け取り合うということが示され、また、自愛心と結びついた交換性向にもとづく契約による交換の確実性に基礎づけられ、同じく自愛心に導かれて、(商品生産者間の社会的)分業がひきおこされるとされるのであった。そしてさらにスミスは、「身分観念の完全な消滅⁵³⁾」を示す表現を用いながら、分業が、各人をして各々の職業における才能(知的才能も含めて)を後天的に養成するとともに、異なる職業にたずさわる人々のあいだに才能の相違すなわち異質的な才能を養成するとしたのであった。そして、この異質的な才能による労働の生産物が私的に交換されることによって、各人は、その必要とする労働の生産物をより豊富により多様に獲得しうることになるのであった。したがって、このことは、第一章の末尾で示された細分化され専門化された異質労働が社会の生産力と富裕の基礎となるための異質労働の社会的結合は、スミスにおいては、各人の労働生産物の契約による

53) 内田義彦, 前掲書, 231ページ。

私的交換に求められ、また、この契約による労働生産物の交換が可能であるからこそ労働の細分化、専門化が可能になる、ということを示すのである。

(商品生産者間の社会的)分業の基礎を私的交換に求めるスミスは、つづく第一編第三章において、その交換を実現させるものとしての市場に注意をむけ、市場の大きさがこの分業の大きさを制限するというを示すのであった。

ところで、労働生産物の契約による交換を基礎とする(商品生産者間の社会的)分業は、交換力の大きさ＝市場の大きさの制約をうけるのであるが、それが許す範囲内で、この分業が進展するとき、それは、社会の生産能力を高めるとともにさらに交換領域を拡大、深化させながら、逆に交換を助長するといったように、この分業と交換は相互連関的に進展する可能性をもつものである。スミスは、分業の進展がいきつく状態を示すものとして、第四章の冒頭においてつぎのように述べる。「いったん分業に限なく確立されると、人がみずからの労働の生産物によって満たしうるのは、その諸欲望のうちの極小部分にしかすぎない。人はみずからの労働の生産物のなかでみずからの消費にあててなおあまる余剰部分を、他人の労働の生産物のなかでみずからが必要とする部分と交換して、その欲望の圧倒的部分を満たすのである。こうして、あらゆる人は交換によって生活する、というのはなにほどか商人になるのであって、社会そのものはまさしくひとつの商業的社会(commercial society)と化するの⁵⁴⁾である」。つまり、第一章でみたような形で行なわれる作業場内分業についてスミスが語るときには、とうぜん、そこでは、「事業主」のもとにおける資本の蓄積と賃金労働者の存在、資本・賃労働関係が前提されているはずにもかかわらず、各人がその労働の生産物を交換しあって生活する社会、各人が生産者であることによって商人であるような社会、したがって産業社会であってそれゆえ同時に交換社会であり、しかも、資本主義社会でも資本主義以前の社会でもなく、「独立生産者のみが形成する満開した商品生産の社会⁵⁵⁾」といった矛盾した不安定な内容をもつ「商業的社会」⁵⁶⁾という社会が出現するというのである。

54) W.N., p.22.この引用文の訳は、小林昇、前掲書、41-2ページによった(なお、一部訳語を変更した)。

55) 小林昇、前掲書、49ページ。

56) 小林昇、前掲書、44-9ページ。

さて、一つの社会モデルとしてのこの「商業的社会」では、各人は各自の生産手段を所有する商品生産者であるから、事業主によって個別労働者が支配されるといった作業場内分業はないであろう。そして、「分業が稱なく確立され」、各人はその労働の生産物を交換しあって生活するのであるから、各人によってなされる労働は、ただ、労働生産物の交換によってのみ結合され、社会的には労働は分業としてのみあらわれるであろう⁵⁷⁾。そして、社会生活の物質的基礎はただ私的交換を基礎とする分業労働によってのみあたえられることとなるであろう。この社会では、本来の資質としては等しいものとスミスが把握する人間が、旧来の社会的、身分的束縛から解放され、各人はそれぞれ生産手段を所有し、他者からの強制によるのではなく、しかし、他者への博愛心によるのではなく、みずからの自愛心にもとづいて主体的に各々の労働に専念し、そして、この労働が、他者の自愛心を承認したうえでの自愛心にもとづく契約による労働生産物の交換をつうじて、社会的分業の一環として社会的労働に組み込まれ、つまり、自愛心にもとづく契約による労働生産物の交換によって社会的労働に結合されることにより、社会的生産力が高まるとともに、この交換をつうじて、各人は、もし儉約で勤勉であるならば、富裕を享受することができるであろう。この社会では、各人は、一面で、自愛心によってたがいに分離されている、しかしながら、その反面、かれらは、たがいに相手の自愛心を承認しあったうえでの、同じく自愛心にもとづく労働生産物の交換によって、間接的に、結合される。そして、この交換に基礎づけられて、自愛心にもとづく社会的分業が行なわれ、それがこの社会の物質的基礎を提供する。それぞれの生産手段を所有する各人は、自愛心にもとづきながら、社会的にみればあいには社会的分業の一環となっている各々の職業における労働に専念しつつ、その必要とする他人の労働生産物を私的交換をつうじて獲得する。そして、各人が享受しうる生産物の量、富裕の程度は、ただ各人の慎慮の程度にのみ依存する。商品としての労働生産物をもつその社会の構成員のあいだでは、支配と従属ではなく、自由、平等、独立のもとでの労働生産物の交換をつうじて、たがいの交換がもたれるであろう。

この社会の物質的基礎は、独立生産者の社会的分業によってのみ提供される。

57) 内田義彦、前掲書、234ページ。

そしてこの社会を構成する独立生産者は、その各々が生産手段をもちそれによってみずからの労働で生産された商品を所有するという意味で、かれらはたがいに自由であり平等であり独立している。⁵⁸⁾しかし同時に、かれらは、全面的な依存関係にある。なぜなら、かれらは、「自分の欲望の圧倒的部分」を、自分の労働生産物と交換に、他人の労働生産物から獲得しなければならないからである。したがってこの「商業的社会」においては、もともとは等質である人間（スミスはそう考えている）の労働によって生産される労働生産物の私的交換が、社会の各構成員のあいだに、もっとも純粋な形で、全面的に展開されるであろう。

分業が社会の生産力と富裕に及ぼす効果を分析したスミスは、その分業論がもたら商品生産という形態における社会的分業論であったために、また、「商業的社会」という概念を提示したために、よりいっそう重要性を示しながら生起してくる問題、すなわち、本来は等質な人間の労働によって生産される労働生産物の私的交換そのものに関する分析へとむかう。

58) なお、小林昇氏が指摘しているように、本文中の第四章からの引用文を含め第一編第一章から第三章には、「事業主」もその「利潤」もともに明示されていない。（小林昇、前掲書、49ページ。）